研究ノート

『台湾文芸』第 9 期王井泉特集における歴史回想に対する一考察

白井　魁

はじめに
第 1 節　『台湾文芸』と日本統治期台湾人作家について
第 2 節　『台湾文芸』と当時の状況
第 3 節　王井泉特集について
おわりに

(要約)
1960 年代にかつて日本統治期に活躍していた作家や文化人が、最も多く集った文芸雑誌は 1965 年 10 月の『台湾文芸』第 9 期王井泉特集であった。この特集に掲載された文章は、日本統治期の文化活動を回想するという特徴をもったものが多い。その上一部には過去を振り返る際に「抗日」の強調と戦後直後に展開された奴隷化論にもつながる要素が存在する。本稿は彼らの文章にこれらの要素が存在する意味に迫る。

はじめに

1965 年 10 月に刊行された『台湾文芸』第 9 期に掲載された王井泉特集は、多くの日本統治期に活躍した台湾人作家や文化人が作品を発表した。その人数は 22 人にも及ぶ。呉濁流が主編を務めていた時代で、日本統治期に活躍した作家や文化人がこれだけ多く集まり作品を発表したのは、この第 9 期のみである。この特集で多くの著者が王井泉との思い出を語りながら、植民地時代の文化活動を語っている。そのなかで多くの人たちは、その回想に「抗日」の要素を交えるといった特徴を備えている。後述するようにこの時代での植民地時代の回想、歴史の記憶というのは、国民党が許容する歴史記憶であり、「抗日」の強調もまたそれに沿うものであった。一方でこの「抗日」を用いた回想方式には戦後初期に展開された奴隷化論への反論とつながる要素も潜んでいた。1960 年代当時の政治状況ではこういった形をとらねば回想をすることは難しかったといえる。しかし後の文学史では日本統治期の一部の作家は『台湾文芸』の創刊を機に復活し、また彼らが『台湾文学』に集ったことで、台湾文学の継承が行われたとみなされている。この点を踏まえると、『台湾文芸』で、これだけ多くの日本統治期の作家や文化人が第 9 期の特集に再び姿を見せ行った語りを、当時の政治状況から外れないもの、とするだけで片付けてしまうのは、彼らの存在意義を些かぼやけたものにしてしまうであろう。むしろ彼らが奴隷化論に反論しながら回想をする意味を深く考える必要がある。

だがこれまでの研究ではこの第 9 期どころか日本統治期に活躍していた作家たちが『台湾文芸』

で発表した作品さえ詳しく分析されていない。

本稿ではこうした状況と上述の問題提起を踏まえ、彼らがこの特集で何を語り、どのように奴隷化論の反論につながる言説を見せているのかを検証し論じていく。

第 1 節　『台湾文芸』と日本統治期台湾人作家について

これまで日本統治期に活躍した作家と『台湾文芸』の関わり方について文学史上ではどのように扱われてきたのか。戦後はじめて台湾文学史のアウトラインを述べた葉石濤は、日本統治期の作家のある者は 1950 年代に沈黙を迫られていた状況[1]を述べつつ、『台湾文芸』の創刊を機に彼らが再び文学界に登場することになったとしている[2]。この見解については、葉石濤に続いて文学史を発表することになる彭瑞金[3]や陳芳明[4]も同一の見解をとる。しかし、彭瑞金は「大部分はたまに姿を現す程度であった」[5]という評価もしており、日本統治期に活躍した作家の扱いに対して細部に違いが生じている。また再登場といっても、彼らが『台湾文芸』に集っていたと記述されるのみで具体的にどのような作品を書いたのか、どのような形で再登場することになったのかにまでは皆触れてはいない。

では『台湾文芸』自体の研究はどのようなものがあるのか。管見の及ぶ限り最も古いものは 1991 年の陳玉玲による「『台湾文芸』研究」[6]である。この研究は雑誌編集の変遷を概略的に追っている。その後 1996 年に張金墻の修士論文「断裂与再生――『台湾文芸』研究 (1964 － 1994)――」[7]が登場する。この論文は『台湾文芸』について最も体系づけられている研究と言える。その内容は『台湾文芸』の創刊の流れと創刊意義について触れただけでなく、その発展史と各編集時期による特徴、『台湾文芸』に集ったメンバーとその精神などについても検討されたものとなっている。その次に新しいものは呂新昌による二篇の論文である。2000 年の「『台湾文芸』与台湾文学」[8]と 2003 年の「従『台湾文芸』的発行看戦後台湾文学的発展」[9]である。前者は『台湾文芸』の紹介のような内容となっており、後者もこれまでの文学史などで語られていることと大差のない内容である。2009 年には蔡翠華による修士論文「六〇年代『台湾文芸』小説研究（1964-1969）――以認同敘事為中心的考察――」[10]が登場する。この研究は小説作品の研究に重点が置かれている。

しかし、これらに総じて言えるのは、日本統治期に活躍した作家の作品に関しての言及が少なく、彼らについて触れても、『台湾文芸』に集合したことによって継承の役割を果たしたという点に留まっているということである。比較的、日本統治期に活躍した作家に言及したのは張金墻である。張金墻も王井泉特集に多くの日本統治期に活躍した作家が集結していることを指摘し、「60 年代の台湾文壇の中で、『台湾文芸』は唯一の日本植民統治時代の文化人を記念する刊行物で、日本植民統治時代の作家が相互に暖をとり合うことのできる場所であった」[11]と述べている。しかし、その作品についての分析は行っていない。

これらの先行研究での状況からわかるように『台湾文芸』第 9 期の王井泉特集はおろか日本統治期に活躍していた作家の作品についてはほとんど言及されていないのである。

第 2 節　『台湾文芸』と当時の状況

内容に入る前に、この特集が組まれた 1960 年代という時代と、日本統治期に活躍した作家や『台湾文芸』がどのような状況だったのかを確認しておきたい。

1960 年代の台湾は、経済発展の兆しを見せ始める時期でもあった。何義麟は、1960 年代以降、台湾は「開発独裁」の時代に入ったと述べる[12]。一方、「開発独裁」の言葉が示すように、政治面では 50 年代の白色テロの空気も消え去ってはいなかった。何義麟は、60 年代は民主化の動向が封じ込められた時代であった[13]とも述べている。若林正丈もまた 1950 年代から 60 年代は、国民党政権による上からの台湾社会に対する一大「中国化」運動の時期と指摘している[14]。

ではこのような時代背景の下で、文学はどのような状況にあったのか。葉石濤の見解を用いるなら、『台湾文芸』創刊まで日本統治期に活躍していた作家は沈黙していたことになるが、この点に関して王恵珍は画期的な意見を提示した。王恵珍は 50 年代、60 年代に彼らは小説創作の場ではなく、対日宣伝雑誌『今日の中国』に参加していたこと[15]や『台湾風物』、『台北文物』などの文献性質の雑誌に参加していたこと[16]を指摘した。また、『今日の中国』には『台湾文芸』や『台湾風物』の作品も転載されていることから、これらの雑誌と密接な関係をもち、合作関係にあったことも指摘している[17]。さらに、本省籍作家の大集結は『台湾文芸』以前に『今日の中国』での集合という土台があってのことだと指摘する[18]。こうした点に目を向けるなら彼らは決してただ沈黙していたわけではないといえるだろう。

では、『台湾文芸』は、1960 年代当時どのような状況に置かれていたのか。応鳳凰は『台湾文芸』については、発行量と影響力はあまり大きくなく、当時文壇で最弱のグループであったことを指摘している[19]。この点に関しては陳芳明の文学史でもとりあげられており[20]、60 年代における『台湾文芸』の影響力の小ささがうかがえる。また、蕭阿勤も『台湾文芸』の評価と影響力の位置付けが大きく変わったのは 80 年代後半以降で、それまでは周縁の位置にいたことを指摘している[21]。これらの指摘は『台湾文芸』は創刊初期の段階では非常に弱小勢力であったという実態を示すものではある。しかしこの弱小勢力『台湾文芸』には日本統治期に活躍した作家たちも集っていた。彼らは、日本統治期に活躍した文化人の追悼特集で再び姿を現した際に一体何を語ったのだろうか。

第 3 節　王井泉特集について

王井泉特集は 1965 年 5 月に逝去した王井泉を追悼するために組まれた特集で、その年の 10 月に『台湾文芸』第 9 期に掲載された。特集の意図に関しては巻末の「編集部雑言雑感」で次のように述べられている。

> 本号は王井泉先生のために特集を発刊した。しかし本雑誌は過去に王井泉先生と関係があったわけではない。そのうえ、王先生は生前、呉社長とも馴染みがあったわけではない。王先

生の日本統治時代の文芸に対する貢献は、精神上でも、物質上でも、払った犠牲は少なくなかった。このためである[22]。

このように、王井泉と『台湾文芸』に深い関わりはなかったが、彼の文化貢献を讃えて追悼特集が組まれたとわかる。王井泉は1905年に台北の大稲埕で生まれた。演劇活動に参加[23]する他、台北で飲食業[24]を営み、1938年には台湾料理店「山水亭」を開設しそこに多くの文化人が集っていた[25]。また芸術家の日本留学の援助をすることもあった[26]。さらに自身もマンドリン奏者であったことから音楽活動にも参加していた。文学方面では張文環、陳逸松とともに『台湾文学』の創刊と発行に携わった。戦後は一時『政経報』の事務や『人民導報』の発行人を務め、1955年に経営の悪化から「山水亭」をたたんだ後は、辜偉甫の助力もあり「栄星花園」で働き1965年に死去した[27]。

それでは、多くの日本統治期に活躍した作家や文化人が寄稿した、というのはどの程度なのか。第9期に掲載された彼らの作品は以下の表1の通りである。

表1　『台湾文芸』第9期王井泉特集作品一覧（筆者作成）

作者	タイトル
辜偉甫	井泉先生這個人
王昶雄	吹不散的心頭人影 - 王井泉快人快事
呉新榮	井泉兄與山水亭
張維賢	悼古井兄
廖水来	王井泉先生與烹飪業
呉李玉梅 / 王昶雄訳	讓時間來冲淡一切的記憶
張郭珠鶯 / 王昶雄訳	從古井兄的逝世談到我的家境
林之助 / 王昶雄訳	半樓（詩）
李超然	回憶
李高慈美	一個溫暖的回憶
呂泉生	王老先生（井泉兄）與我
陳夏雨	井泉兄與我
李君晰	我最忘不了的人
江燦琳	我最所敬愛的「文化仙仔」
高拝石	為善不求名（漢詩）
黄得時	山水亭（漢詩）
台陽美術展	憶當年
陳炳煌	人載建樂園
黄鷗波	懷念古井兄
王錦江	無名英雄的微笑

林玉山	古井兄與臺陽展
川杉浅利	知音之友――王井泉君
吉宗一馬	憶念南方的偉大友人王井泉君
王白淵	文化先覺王井泉的回憶
張文環	難忘當年事
陳遜章	治喪委員會
劉文然	春風十載
林晴川	與老兄
陳逸松	大稻埕貳拾年小史之一頁―山水亭王先生半生逸事―

第 9 期『台湾文芸』には漢詩欄に掲載された漢詩を含めて、のべ 90 の作品があり、王井泉特集は、28 名と 1 団体がそれぞれ一篇の文章や詩を寄稿している。そのなかで日本統治期に活躍した作家や文化人が寄稿した文章は 22 篇に及ぶ。その多くは、王井泉の功績と思い出を語った文章となっている。

すでに述べたように、呉濁流が主編を務めた時代で、日本統治期に活躍した作家が最も多く寄稿したのはこの第 9 期である。彼らの作品数は創刊から第 8 期までは、座談会を除けば、最も少ない号で第 8 期に一作、多くて創刊号と第 3 期でそれぞれ 4 作である。第 10 期以降、彼らの作品は減り、「台湾文学賞特集」と「江肖梅追悼特集」が組まれた第 11 期での五作を最後に、それを上回ることはない。1968 年以降は、第 31 期、第 32 期、第 34 期に呉瀛濤の作品が載った外は、第 43 期に楊逵、龍瑛宗、黄得時、王昶雄、王詩琅の文章が掲載されている。そのほかに 1976 年第 53 期の呉濁流追悼特集に龍瑛宗と王詩琅の文章が載る程度である。このような状況を踏まえれば、第 9 期の王井泉特集は、特集とはいえ最も多く日本統治期に活躍した作家や文化人が集合した特殊な号であるといえる。それでは、その内容はどのようなものなのであろうか。

1. 「抗日」の強調

王井泉特集は、彼との思い出や功績を語る形式をとっているためか、その作品の多くは植民地時代の文化活動を語ったものとなっている。彼らによる文化活動の回想はただ思い出を語っているだけなのだろうか。彼らの回想を読むと一部の者たちは植民地時代の文化活動を振り返るとともに、「抗日」を強調していることに気付く。それが読み取れるのは王昶雄、呂泉生、陳夏雨、江燦琳、林玉山、王白淵、張文環、陳逸松の 8 名の文章である。

具体的にその箇所を見ていこう。王昶雄は王井泉の人柄を語る際、次のようなエピソードを添えて紹介している。

> 日本植民地統治時代では、横暴でほしいままに振る舞い、武力を誇示し威勢を示す日本人に対して、不平を言わずにはおられず、彼〔注：文脈的にこの「彼」は王井泉を指していると思われる〕はなんと口答えをしたり皮肉をいったりしようとし、彼ら〔注：文脈的に日本

人を指していると思われる〕を「島産の有為な人物を焼き払い、覇を唱え自らをもっともよいとする妄想をしている」と責めた。当然ああしたの公にかこつけて私腹を肥やす汚吏、上に諂い下には驕る俗物、明哲保身の偽君子、あまったれで驕った機会主義者などは、みな彼が口汚く罵った対象であった[28]。

このように、王昶雄は王井泉が日本人に対しても簡単にへりくだることのない人物として回想している。

作曲家である呂泉生は、王井泉とともに自身も音楽家として関わった厚生演劇研究会の永楽座での公演を次のように振り返っている。

厚生演劇研究会が永楽戯院で発表会を行った時、「六月田水」と「丟丟銅仔」この二つの男声合唱曲[29]が満席の聴衆を興奮させ一緒に融和し合唱しはじめた！（中略）

その日の夜全ての芝居が終わった後、山水亭に戻った際、彼〔注：王井泉〕は頭を揺らしながら腹を立てた様子の語調で私に言った「さっき警察局が人をよこしてきた、私は明日の朝警察局に行かなければならない！明日は上演を禁じられるのではないかと思う。」私は彼の話を聞いてたいへん驚き恐れた。恐れたのはもしこの二つの民謡のために全部の芝居が演じるのを禁じられたら、どうすべきか？ということであった。（中略）

二日目私は家で彼を待っていた、十時半彼が帰ってきて私に言った「あの二つの民謡は今日からもう歌うことが許されなくなった、彼らがいうには民族の色彩に富んでいるそうだ。皇民化運動中にこのような民謡を歌うのはだめだ。」彼はまた私に言った。「歌うことが許されないなら歌わないが、いずれ私たちは心おきなく歌えるようになる！」[30]

このようにして、呂泉生は自身らが携わった文化活動には民族意識を高める色彩があったという表現をして抗日性を強調している。

また彫刻家の陳夏雨は王井泉からかけられた言葉として次の発言を紹介している。

彼は私に言った。「君の作品が文展に入選した。日本と台湾の新聞ではみな好評価だ。君は異民族の中で栄誉を勝ち取った。君個人の栄誉のみならず同時に台湾同胞の栄誉でもある。君はよくよく努力すべきだ、皆の君に対する希望に背いてはいけない。」[31]

陳夏雨は自身の文化活動が日本と対抗できるものであると、王井泉から評価されたことを挙げて抗日性を強調するものとなっている。

江燦琳は、王井泉を回想するとともに、かつて台湾にあった書店、中央書局について次のように述べている。「中央書局の創立の宗旨は、祖国の文化を紹介し、民族精神を繋ぎとめ、本省の文化水準を高めることである。」[32]。

また、芸術家の林玉山が山水亭を評価する際には、「当時市内の日本人が経営していた一流の

食堂と互いに争い、本省人の才幹を堅持して、また本省人のために少なくない栄誉を勝ち取ることとなった」[33]と、日本人と対抗できたことや、それが台湾人の栄誉でもあったとしている。

王白淵は、王井泉らが中心になって行った「厚生演劇研究会」を振り返りながらこう述べている。

> 日本人の皇民化運動の高潮時に、このような濃厚な中国色彩は、見る者に希望を持たせた。そのときの公演は非常に成功し、毎回満座で多くの人が入場できず、外[34]に立ちなかなか去ろうとしなかった。これは本省の演劇界の最高峰で、また民族意識の最高の表現であった[35]。

王白淵の回想は、当時の演劇活動が民族意識の表れであるとして、皇民化運動に決して流されるものではなかったとするものである。

張文環の回想は、当時の日本の植民地支配に対して抵抗性を強調し、そんな中でも自身らの文化を打ち立てようとしたというものになっている。「日本人になろうとするのは不可能であり、漢民族になろうとすることも政治環境下で難しい。では、なんの文化があるというのか？それは植民地の悲哀と苦悶の文化である。逸松兄と私は一冊の文芸雑誌を作らねばならないと決定した。」[36]

また、張文環とともに文学活動を行っていた陳逸松も日本の植民地支配に対して抵抗性を強調する特徴を帯びている。たとえば、

> 彼〔注：張文環のこと〕が書いた「閹鶏」は台湾農村の中農家庭の日常生活を描き、なんの珍しさもなかったが、台湾人の昔からの音楽の世界、台湾人の旧来の服装、風変わりな青藍の色彩、古き良き習慣を描きだした。これらはすべて日本人が実際は目を閉ざし正視しようとしなかった幻影で、同時に台湾人知識分子も心底では賛美しようとしていなかったが、日本人に見て聞かせることで、その植民地政策の愚かさを反省させようとした[37]。

また、「台湾人は進歩を求め、現代化を求め、日本人に同化されることは求めず、また日本の皇民になろうとはしなかった、これは昭和年代の台湾知識分子が堅持した原則であった。」[38]とも述べている。

このように、彼らは過去を回想する際、「抗日」や民族意識を強調している。しかし、ここで検討したいのは抗日の実態を問うことではなく抗日を強調することの意味である。

台湾意識が芽生える以前の過去の回想と、「抗日」そして祖国＝中国とする形式は、セットのようなものである。蕭阿勤は日本植民統治を経験した作家が70年代以前に過去を回想する際、抗日を強調していたことを指摘している[39]。蕭阿勤は次のようにも述べる。「国民党統治下の公共領域中において合理的で正当とみなされる日本統治期の集団記憶の中で、台湾人の「抗日」経験は、「モデル化」され―それはすなわち「中国化」されることで、あるいは「（中国）民族化」されるといったほうが適切である―そしてその集団記憶経験叙事モデルが形成され、きわめて重

要な歴史の一部になったのである」[40]

『台湾文芸』における彼らの過去の回想も、蕭阿勤のいう「集団記憶経験叙事モデル」に則っているといえる。この「抗日を強調すること」の枠組みに関して蕭阿勤は、70年代初期以前に、日本統治期を親身に経験した本省人作家が、当時の台湾新文学の発展についての回顧し自身らの過去とはなにかという問いに答える際の方式は、国民党が許容する集団記憶モデルと大きな違いはなかったと述べている[41]。しかし彼らの回想は蕭阿勤の言うような集団記憶のモデルに沿ってただ行っているだけなのだろうか。先に示した陳逸松の文章には、それ以外の要素を示すヒントが存在する。次節からは陳逸松の言葉を手がかりに、戦後初期[42]に展開されていた奴隷化論との関連性を述べていきたい。

2. 奴隷化論への反論とその意味

前節で見たように、陳逸松は王井泉特集で日本人に同化されることを拒んだ、つまり日本人化されることを拒んだと述べる。これが何を意味するか。この問題は台湾人奴隷化論と関わっていることが考えられる。黄英哲は「興味深いことに、当時国府は、台湾人が植民地時代に受容した日本の文化や思想を「奴隷化思想」と呼び、日本による教育をも「奴隷化教育」とし、「一掃」しなければならないとした」[43]と述べ、また国民党側の観点を「彼らのいう台湾の「日本化」とは、「皇民化」「奴隷化」「毒化〔毒された〕」の意味にほかならず、日本が残した文化、思想、風俗習慣は、すべて一掃すべき対象とみなされた」[44]と指摘している。要するに奴隷化とは台湾人の日本人化、皇民化を指していたのである。後述するように王白淵をはじめとした多くの台湾知識人が戦後初期この奴隷化論に反論していったが、台湾文学は一時文壇の隅に追いやられるようになってしまった。また丸川哲史は戦後初期に本省知識人が日本統治への抵抗の歴史を強調する必要性と、それが台湾人「奴隷化」論の隠れたテーマとなっていることを指摘している[45]。さらに当時の意見の一つとして、次のようなものがある。黄得時は1946年に新新月報社が主催した座談会でこのように発言する。「精神だけは中国のものでも、その形、外容は必ずしも中国的ではないものは中国文化といへないでせう。日本帝国主義文化が必ずしもすべてが、世界水準に達してゐるとは云へないが、過去における、台湾文化の凡てが、今日皆不必要だとは云へない。」[46]これに対し張冬芳はこう答える。「外省人がわれらに文化がないといふのは、その意味らしい」[47]このような発言から当時台湾の文化が外省人から低く見られており、また「台湾に文化がない」と見られていたことがわかる。

ここでもう一度、陳逸松の回想に立ち返る。彼が抗日と中国意識を強調し日本人との同化を拒んだと述べるのは、台湾人は日本人化されていないという主張であって、これはかつて繰り出された奴隷化論への反論につながるものとして読めないだろうか。

さらに、ここで、奴隷化論という文脈でもう一度他の回想を見て見ると、王白淵の文章にもそれを読みとることができる。王白淵は奴隷化論に対して戦後直後に反論を示したが、20年弱たった後の彼の『台湾文芸』「王井泉特集」での文章には興味深い一節がある。王白淵は王井泉らが中心となって行った演劇を高く評価したが、それをこのようにも述べている。「（前略）セリフは

日本語を用いていたが、舞台の装飾と背景は、完全に中国色彩で、古風な趣があり、私を非常に喜ばせた」[48]。つまり、日本語が用いられながらも、内実は中国要素溢れる作品であったことを強調している。黄英哲は『政経報』で王白淵が示した「奴隷化」への反論から、台湾人が日本語を使うことが奴隷化とみなされる一因であったと述べている[49]。王白淵は次のように述べている。

> 台湾同胞は五十年の奴隷化政策を受けたといえども、決して奴隷化などされていない。百人中九十九人までは決して奴隷化されていないと言ってよい。きれいに中国語を使うことが出来ず、流暢な中国文が書けないだけで奴隷化とみなす。それなら、その見解は余りにも浅はかすぎるし、人を愚弄するものだ[50]

このような言語の問題と奴隷化論との関係を踏まえると、王井泉特集で王白淵が、セリフが日本語であっても民族意識が具わった文化活動であった、と強調する箇所にも、奴隷化論が隠れたテーマとして存在していることが指摘できる。

以上のように、戦後初期の文脈をも踏まえ王井泉特集における過去の回想を読み直すと、王井泉特集における回想でなぜ「抗日」が強調されるのかという疑問には、その答えの一つに、奴隷化論が隠れたテーマとして存在することが挙げられる。かつ奴隷化論は 1960 年代になっても、過去を回想する際に、彼らの前に未だに立ちはだかるものだったのである。

1965 年代の第 9 期『台湾文芸』での一部の回想は、文化活動としての「抗日」を顕示し、集団記憶モデルから外れることなく記述し、自分たちの過去を改めて定義し、正当性をアピールするものとなっていると考えられる。

しかし、なぜ、戦後初期に展開された奴隷化論への反論とつながりのある言説を 1960 年代でも述べる必要があったのか。この王井泉特集が組まれた 1960 年代にも、かつて展開された奴隷化論のような本省人やその文化人への批判はあったのであろうか。

1960 年代の文学状況は既に述べたが、さらに付け加えるなら赤松美和子による『幼獅文芸』への指摘がある。赤松は李瑞騰、古蒙仁、鄭明娳らの証言を用いて、当時の『幼獅文芸』が、現代文学の唯一の読み物であり、憧れの雑誌として存在していた[51]ことを述べている。また執筆者には本省籍作家[52]も参加していたことも指摘されている[53]。要するに、1960 年代の文壇で弱小勢力であった『台湾文芸』に集っていた本省籍作家も『幼獅文芸』など文壇で強い影響をもつ雑誌に参加していたということである。

ここで見逃せないのは、本稿で挙げるような世代の作家である。言語の問題を比較的クリアしていた陳火泉以外、こうした影響力のある雑誌に名は見えない。また彼らが 60 年代に小説の創作をしていなかったことに加え、そもそも日本統治期の作品も広く知られていなかったこともあり、この時期の日本統治期の文学や作家というのは、読者の関心の薄い忘れられたような存在であったとも言える。言い換えるのならば、奴隷化されているとみなされた対象である日本統治期の作家は、60 年代に議論の的になるような存在でなくなっているのである。

また、当時大きな影響力を持っていたメディアの一つである『聯合報』を通観してみても、王

井泉特集が組まれた 1965 年当時にはそのような言説が飛び交ってはいない。つまりこのような状況から判断するのなら、戦後初期のような奴隷化論による「台湾に文化はない」といった言説は、当時は表だって取られていたわけでもなかったといえる。

ではなぜ、60 年代に奴隷化論への反論ともとれるような文章を執筆したのか。それにはまず、戦後初期との違いを述べる必要がある。戦後初期には台湾の本省人知識人たちが奴隷化論に反論を示していたが、王井泉特集の文章は奴隷化論への反論がメインではないということはおさえておくべきである。かつて展開された奴隷化論への反論は、その反論を示すために、自らの活動を振り返ることもあった。王詩琅の「台湾文学運動資料」[54] もその典型的な例であろう。しかし、1965 年の王井泉特集で見せた奴隷化論への反論的言説は、歴史回想のついでに行われているものである。つまり奴隷化論へ反論するために歴史回想をするのではなく、歴史回想をする際に奴隷化論への反論につながる要素があるという違いが存在する。彼らが過去を回想し、それを肯定するには「抗日」の歴史記憶のモデルに沿うというだけでなく同時に奴隷化論という問題は否定され、処理されなくてはならないものとして存在していたのである。国民党独裁体制下で、外省人はおろか本省人にさえ日本統治期の文学や文化が理解されていなかった時代に、過去を回想するには、それを行わなければ回想できるはずもなかった。

さらに考慮すべきは、『台湾文芸』という雑誌の性格である。『台湾文芸』は当時最弱グループで、閲読しているのはほぼ『台湾文芸』の身内であった。しかし、当時彼らが発表できる文芸性質の雑誌は『台湾文芸』ぐらいであった。なにより書記言語の問題が付きまとっていた。白話文での創作経験のある王詩琅のような存在を別としても、多くの者は創作を行えるほど自在に中国語を使えるわけではなかった。事実、第 9 期の一部の文章は王昶雄によって翻訳されたものも存在する。彼らにとって『台湾文芸』は中国語に不自由しても、文章を発表できる場であった。一方で、『台湾文芸』における彼らの作品の少なさについては、言語による問題がやはり完全には解消されなかったことにも原因があると考えられる。先述の張金墻論文は、1996 年の 10 月 5 日に呉濁流学術研討会での鍾肇政による呉濁流についての回想 [55] を引用して、呉濁流が同世代の作家にやや不満を持っていたことを指摘している [56]。年齢による体力的な問題も加味して、中国語による創作が自在に行えない以上、日本統治期に活躍した作家にとって書けるものは回想文や随筆、散文などであったろう。彼らが「昔のことを持ちだして自慢」するのも無理もなかったといえる。

また創刊者である呉濁流と彼らには多少の相違点も存在する。この第 9 期を例にとると、彼はこの特集に対して特に文章を発表していない。当然呉濁流と王井泉はほとんど面識がなかったことも関係している。第 9 期の特集で呉濁流の名が見られるのは李君晰による回想の中で、呉濁流が一度王井泉を訪ねたことに触れたのと、陳遜章による王井泉告別式のレポートで、呉濁流が弔辞を読んだという箇所のみである。

呉濁流の遺作『台湾連翹』[57] での記述や『瘡疤集（上）』の「自序」[58]、及び『台湾文芸』創刊号での文章 [59] を合わせて読めば、『台湾文芸』はかつての日本統治期の作家の再起の熱意と若手の世代への激励のために創刊されたことがわかる。それに加え、『台湾文芸』創刊後の文章である 1964 年 5 月の第 2 期の「給有心人一封信」[60]、同年 6 月第 3 期の「覆鍾肇政君一封信　併希望

青年家読一読」[61]、1968 年 1 月第 18 期の「為台湾文芸講幾句閑話」[62] からは呉濁流は自身の過去を肯定するよりは若手の創作による振興を望んでいたことがうかがえる。また、呉濁流はかつて『台湾新文学』に作品を発表したこともあったが、基本的には日本統治期に活躍していた作家たちとは離れた場所にいたため、彼らと経験を共有している部分が少なかった。呉濁流と彼らにはこうした相違点があったことは見落とせない。しかし、呉濁流にまったく過去の肯定や「抗日」性の強調などがなかったわけではない。なにより呉濁流は戦後初期に奴隷化論に反論してきた作家の一人である。例えば先述の「覆鍾肇政君一封信 併希望青年家読一読」ではかつて皇民化運動を皮肉って書いた「先生媽」を皇民奉公会の顧問を兼ねるある教授に見せて反省することを望んだ、と述べる[63]。また、1964 年 6 月の『台湾文芸』第 3 期では王詩琅によって「日據時期的台湾新文学」が掲載されるが、この文章は若手に日本統治時代の文学を伝えることを呉濁流から頼まれ執筆されたものである[64]。このように、呉濁流にもある程度過去の台湾文学を肯定させようとするねらいがうかがえる。しかし、呉濁流についてはまだまだ検討すべき余地が残されているため、紙幅の都合上、彼と『台湾文芸』に参加した日本統治期に活躍した作家については稿を改めて述べることにしたい。そもそも呉濁流と日本統治期に活躍した作家は二分できるようなものではなく、日本統治期に活躍した作家も多様的である。たとえば白話での創作経験のある王詩琅と日本語で創作していた作家とではやはり経験も異なるであろうし、戦争中に中国経験があるかないかでも戦後の歩みは違ってくるであろう。

以上を踏まえて、この第 9 期で日本統治期の作家や文化人が奴隷化論に反論しながら過去を回想したことには一つ意義を見いだすことができる。日本統治期の文学は、後に再発見され、「台湾文学の伝統」と位置付けされるようになり、『台湾文芸』は「台湾文学の伝統」を継承したと評されるようになったが、『台湾文芸』は彼らの回想を掲載したことで、「台湾文学の伝統」の保存庫としての役割を果たしかつ継承性を代表できる存在になれたということである。先述のように『台湾文芸』は 80 年代以降、その評価が変化し、50 年代の「戦闘文芸」優位下での台湾文学の復興として形容され「民族文学」の中で重要な役割を演じたとみなされるようになった[65]。かつ日本統治期の文学は 70 年代に「郷土回帰」の潮流の中で再検討されるようになる[66]。その際の史料となるには、日本統治期の文学があまり知られていない時代に、第 9 期の回想で行われるような当時の「当然の」語り方をして保存されておく必要がある。またそれは発表の場が当然必要であった。つまり、1960 年代当時に影響がなくとも、後の時代に『台湾文芸』が日本統治期の台湾文学を「継承」したとされるには、こうした地道な土台が必要で、そうでなければ現在のように評価されなかったであろう。このような展開は王井泉特集に参加した者たちも当時は当然想像してはいなかったであろう。だが台湾文学は日本統治期の台湾文学を「伝統」として継承する方向に進んだ。そのため、彼ら自身による言葉で日本統治期の文学活動が記録された文芸雑誌『台湾文芸』は「台湾文学の伝統」の継承性を代表できる存在になったともいえる。

おわりに

だが本稿で最後に述べた見解は、これまでの文学史を大きく超えるものとは言い難い。彼らの回想に奴隷化論への反論に連なる要素が存在する意味はさらに深く検討する必要がある。また、彼らのことを知らしめるという点においては同時期に鍾肇政によって出版された『本省籍作家作品選集』も絡めて論じる必要がある。さらにいえば、日本統治期の作家や文化人が 70 年代以降どのように受容されたのかも検討が必要であろう。

課題は多く残されているが、本稿では日本統治時代の文学が再発見される以前に、比較的多くの日本統治期に活躍した作家や文化人が集った『台湾文芸』第 9 期の王井泉特集における回想には、戦後初期に展開された奴隷化論につながる要素が存在することに着眼点を当て、それを整理し提示することで筆を置きたい。

注

1 葉石濤は具体名として楊逵、呉濁流、楊雲萍、黄得時、張文環、龍瑛宗そして死去した呂赫若を挙げている。（葉石濤『台湾文学史網』高雄：春暉出版、2010 年、151 頁）
2 葉石濤『台湾文学史網』、151 頁。
3 彭瑞金『台湾新文学運動四〇年』高雄：春暉、1997 年、124 頁。
4 陳芳明『台湾新文学史』台北：聯経出版、2011 年、483 頁。
5 彭瑞金『台湾新文学運動四〇年』、129-130 頁。
6 陳玉玲「『台湾文芸』研究」『台湾文学観察雑誌』第 3 期、1991 年、36-55 頁
7 張金墻「断裂与再生――『台湾文芸』研究 (1964 － 1994) ――」(国立成功大学歴史学研究所 , 碩士論文)、1996 年、1-194 頁。
8 呂新昌「『台湾文芸』與台湾文学」『国文天地』2000 年、39-44 頁
9 呂新昌「従『台湾文芸』的発行看戦後台湾文学的発展」『大河之歌：鍾肇政文学国際学術会議論文集』2003 年、605-623 頁。
10 蔡翠華「六〇年代『台湾文芸』小説研究 (1964-1969)――以認同敘事為中心的考察」（国立台湾師範大学台湾文化及語言文学研究所 , 碩士論文）、2009 年、1-144 頁。
11 張金墻「断裂与再生――『台湾文芸』研究 (1964 － 1994) ――」、63 頁。
12 何義麟『台湾現代史――二・二八事件をめぐる歴史の再記憶』平凡社、2014 年、143 頁。
13 同上書、143-144 頁。
14 若林正丈『台湾の政治 中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会、2008 年、78 頁。
15 王恵珍「六〇年代台湾文学的日訳活動――『今日之中国』的文学翻訳与文化政治」『台湾文学研究学報』第 23 期、2016 年、261-264 頁。
16 同上論文 274 頁。
17 同上論文 283 頁。
18 同上論文 284 頁。
19 應鳳凰「文芸雑誌、作家群落与六〇年代台湾文壇」東海大学中国文国系主編『苦悶与蛻変 六〇 , 七〇年代台湾文学与社会』台北：文津出版社、2007 年、147 頁。
20 陳芳明『台湾新文学史』台北：聯経出版、483 頁。
21 蕭阿勤『重構台湾』台北：聯経出版、2015 年、第二版（初版 2012 年）、161-169 頁。
22 編集部「編集部雑言雑感」『台湾文芸』第 9 期、1965 年、巻末 (167 頁) 、『台湾文芸重刊本 第二巻』台湾文芸出版社、1984 年（以下本稿における『台湾文芸』の出典はこの復刻本に拠る）
23 例えば「新光社」、「星光演劇研究会」、「民烽演劇研究会」、「厚生演劇研究会」など。
24「カフェー・エルテル」や西洋料理店「ボレロ」に参加していた。

25 張文環や張星建、林玉山、陳夏雨、楊三郎、李石樵、黄鷗波など。
26 王白淵「文学先覚王井泉的回憶」『台湾文芸』第 9 期、1965 年、46 頁。
27 王井泉の経歴については『台湾文芸』第 9 期と林振莖「大稲埕美術活動的賛助者――以王井泉与山水亭為中心――」『台湾美術』第 93 期、2013 年、28-43 頁及び 2000 年 11 月の『台北画刊』第 394 期「台北人物誌特刊」24 頁の荘永明が執筆した略伝を参照した。
28 王昶雄「吹不散的心頭人影 - 王井泉快人快事」『台湾文芸』第 9 期、1965 年、6 頁。
29 呂泉生は民謡の「丟丟銅仔」と「六月田水」に譜をつけ、この二曲は厚生演劇研究会の永楽座での公演「閹鶏」に使用された。
30 呂泉生「王老先生（井泉兄）与我」『台湾文芸』第 9 期、1965 年、19 頁。
31 陳夏雨「我与井泉兄」『台湾文芸』第 9 期、1965 年、20-21 頁。
32 江燦琳「私所敬愛的「文化仙仔」」『台湾文芸』第 9 期、1965 年、26 頁。
33 林玉山「古井兄与台陽展」『台湾文芸』第 9 期、1965 年、36 頁。
34 劇場の外を指していると思われる。
35 王白淵「文学先覚王井泉的回憶」『台湾文芸』第 9 期、1965 年、48 頁。
36 張文環「難忘当年事」『台湾文芸』第 9 期、1965 年、51 頁。
37 陳逸松「大稲埕弐拾年小史之一頁――山水亭王先生半生逸事――」『台湾文芸』第 9 期、1965 年、63 頁。
38 同上書、63 頁。
39 蕭阿勤「抗日集体記憶的民族化：台湾一九七〇年代的戦後世代与日據時期台湾新文学」『台湾史研究』第 9 巻第 1 期、2002 年、192-195 頁。
40 同上論文、186 頁　（注：この蕭阿勤の論文に関しては和泉司による翻訳が存在し呉密察・黄英哲・垂水千恵編『記憶する――台湾帝国との相剋』東京大学出版会、2005 年に収録されている。本稿は和泉氏の訳を参考に筆者によって原文を再翻訳した。）
41 同上論文、196 頁。
42 本稿では戦後初期の定義を葉芸芸に則り、1945 年から 1949 年までとする。葉芸芸「試論戦後初期台湾知識分子及其文学活動 (一九四五年――一九四九年)」『文季』第 2 巻第 5 期、1985 年、1-18 頁。
43 黄英哲『台湾文化再構築 1945 ～ 1947 の光と影――魯迅思想受容の行方』創土社、1999 年、172 頁。
44 同上書、173 頁。
45 丸川哲史「二 . 二八事件以後の「沈黙」の意味――『国声報』『南光』副刊を中心として――」『日本台湾学会報』第 7 期、2005 年、112 頁。
46 新新月報社「談台湾文化的前途」『新新』第 7 期、1946 年、江宝釵編『黄得時全集 2 創作巻二』台南：国立台湾文学観、2012 年、420 頁。
47 同上書 420 頁。
48 王白淵「文学先覚王井泉的回憶」、48 頁。
49 黄英哲『台湾文化再構築 1945 ～ 1947 の光と影――魯迅思想受容の行方――』、177 頁。
50 王白淵「告外省人諸公」『政経報』第二巻第 2 期、1946 年、1-2 頁。
51 赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ――読者と作家のインタラクティブな創造空間――』東方書店、2012 年 24 頁。
52 黄春明、陳映真、鍾肇政、鍾鉄民、葉石濤、鄭清文、李魁賢、李喬らを挙げている。
53 赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ――読者と作家のインタラクティブな創造空間――』、26 頁。
54 王錦江「台湾新文学運動史料」『新生報』副刊 1947 年 7 月 2 日
55 鍾肇政は次のように述べる。「呉さんは老先生たちがあまり頼りならないことを早くから察していた――たぶんこの時から、常に私に対して彼らを「老人はつかいものにならない」と、実際の仕事をする力もなく、大会を開いたときには台に上って切りなくしゃべりだして、昔のことを持ちだして自慢している、と不満を言っていた――第二回からは、審査委員を一新し、林海音と私が残ったのを除いて、そのほかはすべて変わった」（鍾肇政『鍾肇政回憶録（二）文壇交友録』台北：前衛、1998 年、82 頁）なお張金墻は、1996 年 10 月 5 日の呉濁流学術研討会での鍾肇政の文章「鉄血詩人呉濁流」を用いている。
56 張金墻「断裂与再生――『台湾文芸』研究 (1964 － 1994) ――」、50 頁。
57 呉濁流『台湾連翹』台北：草根出版 2011 年 254 頁。
58 呉濁流「自序」『瘡疤集（上)』台北：集文書局、1963 年、3-4 頁。
59 呉濁流「台湾文芸的産生」『台湾文芸』創刊期、1964 年、46 頁。

60 呉濁流「給有心人一封信」『台湾文芸』第二期、1964 年、53 頁。
61 呉濁流「覆鍾肇政君一封信 併希望青年家読一読」『台湾文芸』第三期、1964 年、69-71 頁。
62 呉濁流「為台湾文芸講幾句閑話」『台湾文芸』第 18 期、1968 年、9 頁。
63 呉濁流「覆鍾肇政君一封信 併希望青年家読一読」『台湾文芸』第三期、1964 年 70 頁。
64 王錦江 (1964)「日據時期的台湾新文学」『台湾文芸』第 3 期、49 頁。
65 蕭阿勤『重構台湾』、161-162 頁。
66 蕭阿勤「抗日集体記憶的民族化：台湾一九七〇年代的戦後世代与日據時期台湾新文学」『台湾史研究』9(1)、183 頁。

（2016 年 10 月 5 日投稿受理、2017 年 3 月 21 日採用決定）